☆帝国主義の侵略反革命を粉砕し全世界の帝国主義を打倒せよ！　スターリン主義との国際党派闘争を組織し、世界プロレタリア革命―世界プロ独―共産主義を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に創建せよ！

1986年
2月15日
第367号
編集発行人　高木一夫
一部200円

烽火

NOROSHI

共産主義者同盟（全国委員会）
■ 大阪戦旗社　大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号　Tel(06)371-3706
○郵便振替　大阪3―63333　高木一夫
○銀行口座　第一勧銀　515-1058150　高木一夫

天皇60年式典粉砕

反天皇制闘争をプロレタリア政治闘争と結合せよ！

全国のたたかう労働者、学生諸君！

本年十一月に任期切れを迎える中曽根は、年頭記者会見において「戦後政治の総決算」を断固としておしすすめていく決意を示した。日帝ブルジョアジーにとって一九八六年は、侵略反革命戦争とファシズムにむけた決定的な年として位置づけられている。五月東京サミットを通した侵略反革命同盟の強化とGNP一%枠をふみこえんとする大軍拡、戦争ができる国家への改造計画である行革・教育臨調の推進、国家秘密法の再上程、国鉄分割・民営化と帝国主義的労戦統一の促進などすさまじいばかりである。

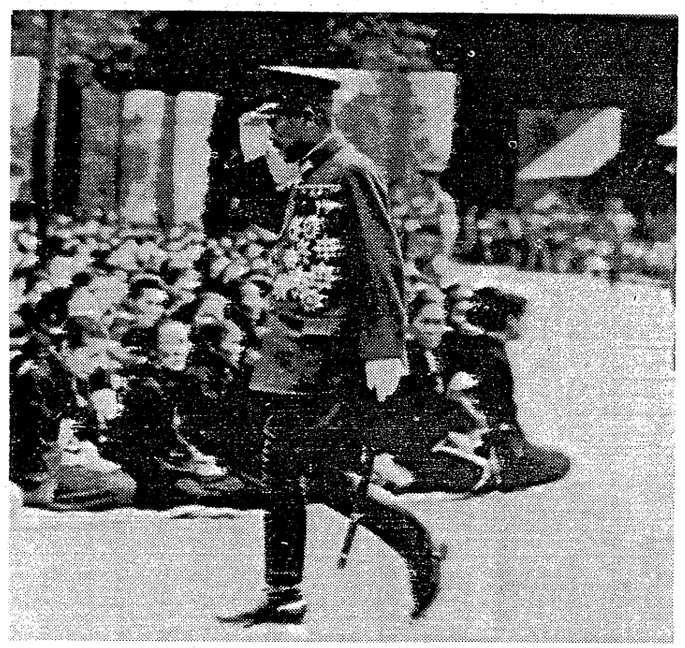
かかるなかで、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃が、「戦後政治の総決算」攻撃の中軸として、戦後かつてない激しさでうちおろされている。昨年の靖国神社公式参拝、日の丸・君が代の強制につづいて、本年四月二九日には東京両国の国技館において政府主催の天皇在位六〇年式典が予定されている。ひきつづいて一〇月には皇太子訪韓が、八七年九月沖縄国体には天皇の訪沖が強行されようとしている。

とりわけ、四・二九天皇在位六〇年式典は、決定的位置をもつものである。日帝ブルジョアジーは、約半年をかけて商業新聞などを利用しつつ奉祝キャンペーンを大々的に組織してきた。またブルジョアジーに援助された生長の家など右翼ファシストどもは、昨年十一月十三日に民間奉祝式典をおこない、四・二九にむけて日本全国を日の丸と奉祝キャンペーンで埋めつくそうとしている。

たたかう労働者・学生は、この奉祝キャンペーンをズタズタに切り裂き、四・二九式典粉砕のために全力でたたかわねばならない。

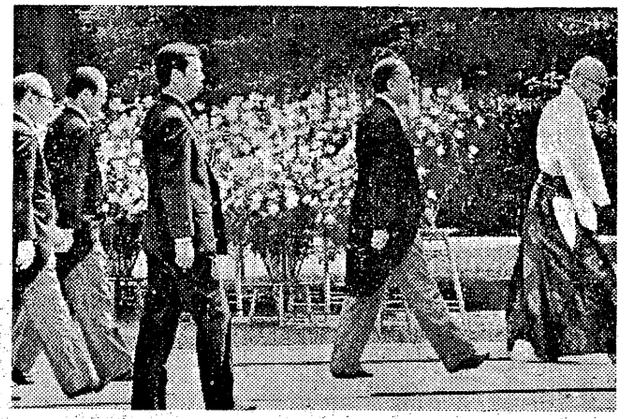
第一章―六〇年式典の政治的ねらい

日本プロレタリアートは血ぬられた戦犯天皇ヒロヒトの在位六〇年を祝うことなど絶対にできない。



天皇は最大の戦争犯罪人。天皇制下でおおくの労働者人民がアジア侵略に動員されていった。

想い起こしてもみよ。ヒロヒトの即位から五年後の一九三一年、日帝は柳条胡事件をひきおこし、中国・アジアへの本格的な侵略反革命戦争に突き進んでいった。三〇万人をこえる南京大虐殺をはじめ、日本軍はアジア全域において「殺しつくし、奪いつくし、焼きつくす」筆舌にあらわしがたい残虐行為をくりひろげた。侵略反革命戦争に動員され戦死した労働者・農民は二六〇万人にのぼり、沖縄戦を含めて非戦闘員の死者は一〇〇万人にのぼった。この戦争のすべてが天皇の名のもとにおこなわれた。また治安維持法のもとで多数の共産主義者や民主主義者が獄中に奪われ、残酷な拷問によって虐殺されていった。これもまた天皇と天皇の国家＝「国体」の護持の名のもとにおこなわれた。天皇ヒロヒトは、日帝ブルジョアジーによる侵略反革命戦争への国民総動員と階級闘争の絶滅を強力に



靖国神社公式参拝を強行した中曽根(85年8月15日)

在位五〇年式典にさいして天皇ヒロヒトは、「戦争責任などという文学的問題には答えられない」と許しがたい居直りをおこなった。昨年来の奉祝キャンペーンはそこにとどまらない。「陛下の終戦のご決断がなかったら、いや日本に天皇制の伝統というものがなかったら、日本はいったいどのようになっていたでしょうか。私はそのことを思うと、天皇がおられたことに心から感謝せずにはいられない気持ちになるのです」「代々の天皇が天皇という立場において、たえず国家の発展、国民の幸せ、そして世界の平和を祈ってこられた」（松下幸之助・Ｖｏｉｃｅ八五年四月）など、〝天皇の終戦の聖断が日本を救った。天皇（制）あっての日本だ〟という主張が強力にうちだされてきている。そこでは天皇の戦争責任の否定のみならず、天皇と国家・国民が一体であることがうたいあげられ、ふたたび侵略反革命戦争にふみだす「国難」の時に天皇の名のもとに国民を動員するための地ならしがはっきりともくろまれているのである。昨年九月五日の日の丸掲揚、君が代斉唱を実質上義務づける文部省通知発送、十月一七日の政務次官会議における日の丸、君が代法制化の検討指示など一連の日の丸、君が代攻撃の強化は、この一部を構成する重大な攻撃にほかならない。

六〇年式典の政治的ねらいの第二は、天皇の元首化をおしすすめ、天皇を元首としておぐところのアジアの盟主として日帝をおしだすことにある。

日帝ブルジョアジーは六〇年代末から七〇年代はじめ、資本主義の世界的危機の深まりと日帝の侵略反革命戦争準備の本格的開始とともに、天皇を実質上の国家元首としておしだしはじめた。一九七一年の欧州歴訪、七五年の訪米は、旧交戦帝国主義国を訪問することによって第二次大戦の戦争責任に最終結着をつけ、実質上の元首として対外的に天皇が再登場していくための基盤をつくるものであった。そして八四年の秋の全斗煥来日時には天皇・全斗煥会談がおこなわれ、天皇ヒロヒトは「両国の間に不幸な過去が存在したことは誠に遺憾である」とのべた。それは日韓のマスコミを総動員して報道され、過去の「謝罪」のうえに「日韓新時代」の幕明けが大々的に宣伝されたのである。この天皇発言は「謝罪」をよそおいつつ、戦前の植民地支配の歴史を反動的に清算するばかりか、天皇の名において全斗煥独裁政権を擁護し、日帝の現在の南朝鮮にたいする新植民地主義支配への屈服を日韓両国プロレタリアート人民に迫るという高度な政治的攻撃であった。日帝は天皇を国家元首としておしだし、その権威と統合機能をフルに利用して、天皇・皇族に直接的に侵略反革命と新植民地主義支配を擁護する役割りをはたさせる段階にふみこんだのである。

この点でわれわれが絶対に阻止しなければならないのは、今秋十月に策動されている皇太子アキヒトの訪韓である。一月四日、韓国の聯合通信は、八四年の全斗煥訪日にたいする答礼のため日本政府が天皇の代理として皇太子を十月に訪韓させるという構想を韓国に伝達し協力するよう要請したと報じた。皇太子訪韓は全斗煥独裁政権にたいする強力なテコ入れとなるものだが、ひきおこされる事態はそこにとどまらない。全斗煥を支える日帝の新植民地支配打倒のスローガンをかかげるにいたった南朝鮮の先進的労働者学生は、皇太子訪韓をみのがさず決死の闘争にたちあがるであろう。日帝と全斗煥は皇太子警備を理由に最大限の戒厳体制をしき、先進的部分の一挙的壊滅をねらうとともに、皇太子の歓迎を理由に反体制運動の中から反日の要素をぬき去り、広範に存在する反日の気運を霧散させようとすることは確実である。さらに日帝は皇太子訪韓にたいする韓国内の反対行動をとらえて、韓国反体制運動への日本労働者人民の排外主義的反発をあおりたて、新植民地主義支配と戦争準備の強化をねらうだろう。

外交面から先行した天皇元首化の動きは、国内外にも天皇を元首としておしだしていく攻撃へと波及するであろう。自民党が内部検討をつづけている改憲草案が、第九条の改悪とともに天皇元首化を明記していることは衆知の事実である。

四・二九式典はこのような天皇元首化攻撃を飛躍的に強化するものとなる。式典では中曽根をはじめとした政府の代表が天皇を賛美し、天皇と日本の国家と民族の繁栄が一体のものであるとうたいあげるであろう。天皇が国家元首であることを浸透させ、そのもとへの国民統合をはかっていくためにまたとないセレモニーとして四・二九式典はあるのである。さらにヒロヒトの即位（一九二六年十二月二六日）から六〇年という意味では今秋におこなうべき式典（在位五〇年式典は七六年十一月十日であった）を、あえて五月四日からはじまる東京サミットの直前にもってきたことは、たんに中曽根の任期切れまでに式典をおこなおうという理由だけではない。四・二九から五・四と連続する政治過程をとうして、天皇を元首にいだくアジアの盟主としての日本を他帝国主義首脳にたいして強烈にうちだし、日本の労働者人民の中に大国意識、民族排外主義を浸透させていくことが目的なのである。

六〇年式典の第三の政治的ねらいは、右翼ファシズム運動を育成し、式典警備を理由にした戒厳体制下で革命的左翼を解体し、戦闘的労働運動・大衆運動の弾圧を強化していくことにある。

右翼ファシズム勢力はこのかん国家秘密法制定、靖国神社公式参拝、日の丸・君が代の強制、改憲などを課題として、右からのエセ

大衆運動を組織し影響を拡大してきた。そして国家秘密法に典型なように、彼らの請願によって地方議会での決議をつみ重ね、それを背景として日帝が戦争とファシズムの準備を強行していくというパターンすら定着させてきた。日帝が六〇年式典をとうして右翼ファシズム運動を育成し、階級闘争の暴力的破壊と戦争とファシズム準備への労働者人民の組織化を強力に支えるものとしていこうとねらっているのは明らかである。

また四・二九から五月サミットにいたる過程において東京を中心にひかれる厳戒体制は、それ自身が戒厳令の予行演習といえるものなのだが、天皇のためなら何をやっても許されるとばかりに、共産主義運動、戦闘的労働運動、学生運動を重監視下におき、徹底した予防弾圧と闘争破壊にふみだすことは確実である。

四・二九首都戒厳体制をうち破り、十月皇太子訪韓策動から八七年沖縄国体・天皇訪沖、そしてXデー（天皇の死を利用した一大攻撃）とつづく天皇攻撃を、真正面から粉砕する断固たる闘争を全力で組織しなければならない。

第二章　天皇制と対決するわれわれの立場

戦後四〇年のあいだに象徴天皇制への屈服から天皇制との闘争は意味がない、もしくは成立しないという風潮が広く生みだされてきた。天皇制・天皇制イデオロギー攻撃が戦争とファシズム準備の要として急速に強化されていく中で、このような現状は根底的に変革されねばならない。

このような現状を生みだしていった根拠には、戦後階級闘争の中で圧倒的な影響力をもってきた社共の誤りがある。さらにそれは戦前の天皇制との闘争における誤りと敗北につながっている。われわれは天皇制との闘争を強力につくりだし、発展させていくために、天皇制・天皇制イデオロギー攻撃の歴史的経過と性格を鮮明にし、これとたたかう立場を確立していかねばならない。

ブルジョア独裁支配の支柱としての天皇制

徳川幕府を倒して成立した明治国家は、封建時代のほぼすべての期間にわたって何らの政治的実権をもたなかった天皇を国家の中心に据えた。一八八九年に発布された大日本帝国憲法は「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」（第一条）「天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬」（第四条）すると定め、天皇が唯一の統治権者であると規定した。そして「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」（第三条）と定め、天皇は何ものからも超越した神聖な存在であって、国政に関する責任を問われないと規定された。こうして政府、軍隊、裁判所などいっさいの権力と権威の源泉は天皇にあるとされた。

同時に天皇制イデオロギーが労働者人民の中に徹底して上からうえつけられていった。古事記、日本書紀の神話にもとづき「万世一系の天皇が日本を支配しつづけてきた」「日本民族は単一民族である」という虚構のうえに成立した「皇国史観」と、天皇は国民すべての父であり国民はその子供であるから天皇に忠誠をつくさねばならないとする国家観にまでおしひろげられた家父長制イデオロギーをそれは中心とするものであった。天皇制イデオロギーは天皇と天皇に権威づけられた国家権力を強力に支えるとともに、天皇を元首とする日本民族は他民族に優越するものであり世界を支配すべき民族であるという民族排外主義の支柱としての、また階級闘争絶滅のイデオロギー的支柱としての役割りを強力にはたした。

日共をはじめとして、明治維新をもって天皇制絶対主義が成立し、それは戦後の米帝占領軍による「民主化」まで継続したとする見解が広く存在している。

われわれはそうは考えない。絶対主義とは封建制下の農奴の反乱から封建領主階級の利益を防衛することを目的とした封建制末期の中央集権国家をさす。絶対主義は資本主義的生産関係の発展を生みだすが、それも封建領主階級の支配と利益をおびやかすことのない範囲においてである。しかし一八六八年の明治維新を前後して数十年におよんだ激動がいったん終了した一八〇〇年代末までには資本主義的生産が支配的なものになり、ブルジョア独裁国家が確立するにいたったとみるべきである。廃藩置県、地租改正などによって旧来の封建領主は、封建的な政治的経済的実権を失い、他方、国有財産のブルジョアジーへの払い下げなどをとうして資本主義の育成が上から強力におしすすめられた。そして日清・日露戦争をへた一九〇〇年代のはじめには資本主義的帝国主義の段階に移行した。

この過程は西欧における典型的なブルジョア民主主義革命とは大きく異なっている。ブルジョアジーは最初は明治維新をになった部分（後の天皇制官僚）と結びつき、これを援助することによって資本主義の本格的発展をおしすすめ、後にはブルジョア独裁支配を強力に補完するものとして天皇制・天皇制イデオロギーを利用しつづけていったのである。

そして一九二九年の世界恐慌にはじまる資本主義の危機の深まりを背景にした階級対立の激化の中で、ブルジョアジーは侵略反革命戦争への国民総動員と階級闘争の根絶を目的にして、天皇制・天皇制イデオロギーを支柱としたファシズム統治形態へと転換していった。

一九四五年の日本帝国主義の敗戦によっても天皇制は消滅することはなかった。天皇制は敗戦と直後の激しい政治的動乱という政治過程に耐えて生き残り、象徴天皇制へと姿をかえて日本の階級社会に存続しつづけてきた。天皇制はブルジョアジーによって延命させられ、日本のプロレタリアートはこれを阻止することができなかった。

かつて明治憲法下で神聖不可侵の存在として規定され、統治権の全的保持者と規定された天皇は、みずからその神格性を否定して絶対者的地位を降りた（一九四六年一月「人間宣言」）。天皇ヒロヒトはもはや天皇制が権力をもたない非政治的・形式的な存在にすぎなくなったことを人民大衆に印象づけるよう戦後社会において努めてきた。

現代の天皇制（象徴天皇制）は、米帝占領軍と旧日帝支配者階級のあいだの取り引きの産物であった。敗戦帝国主義国・日本のブルジョアジーは天皇を元首から象徴の位置に後退させることで、米帝に天皇の存在を認めさせ、天皇制の温存をはかった。日本のブルジョアジーにとって天皇制の護持は、資本主義体制の維持と同等の意味をもっていた。つまり彼らは天皇制に戦後革命にたいする盾の役割りを期待した。

米帝は日帝の武装解除の一環として天皇制を去勢し、自己にたいして無害な存在に変え、他方で天皇制がもつ特別の宗教的権威と統合機能を利用しようとした。

米帝と日帝ブルジョアジーが共通して恐れたのは、敗戦を契機にしてほとばしった日本プロレタリア人民の変革のエネルギーが社会主義へとむかうことであり、中国・朝鮮などのアジアの民族解放―社会主義勢力と合流していくことであった。「天皇制は占領軍二〇個師団に相当する」（マッカーサー）と言われたように、天皇制は日本の内外の革命運動への反革命防波堤として温存されたのである。

象徴天皇制は他面において、戦後革命期をたたかいぬいた日本プロレタリアートにたいするブルジョアジーの側の妥協の産物であったともいえる。しかしこれは、はなはだ一方的な妥協であり、ブルジョアジーはこれによって天皇制を存続させ、あわせて将来の再度の天皇元首化の可能性を残したが、プロレタリアートの側はかえって敵の姿を見えにくくさせただけであった。日本プロレタリアートは天皇制を日本の敗戦という決定的瞬間に葬りさることができずに、形を変えた存続を許した。

法制度上の実権こそ大幅に喪失したが、象徴天皇制は戦後政治においてブルジョアジーの精神的支柱となり、ブルジョアジーを補完

するという政治的機能をはたしてきた。四六年の「人間宣言」とそれにつづく全国巡幸以来の「国民に愛される天皇・皇族像」の意識的演出、あるいは五九年の皇太子「御成婚」をひとつのピークとする「皇室ブーム」づくりによる象徴天皇制の認知強要は、人民大衆を戦後復興した日本資本主義のもとへとりこみ、現体制容認をせまる思想攻撃でもあった。そしてこれは一定の成功をおさめた。しかしブルジョアジーにとってそれは、あくまでも妥協の範囲のなかでの成功にすぎない。象徴天皇制への過度の依存は、天皇制の権威の弱化につながりかねないという矛盾をブルジョアジーはかかえてきたのである。

いま日帝による戦後支配体制の転換にともない、またその先導役の位置をも占めて、現代の天皇制はその妥協的性格の解消にむかって再度の変ぼうを開始しようとしている。もともと天皇制は、ときの支配階級の要請に応じて変化するという柔軟な一面を保持しつづけてきたが、今日における帝国主義間対立の激化とブルジョアジーの危機の深まりのなかで対外侵略のための排外主義的統合をになうべく、天皇と天皇一族はふたたび政治の前面に登場してきたのである。より強力な権威と侵略のイデオロギーを天皇制に求めざるをえないブルジョアジーは、象徴天皇制にピリオドをうち、改憲と天皇元首化に着手しはじめた。これは、日帝が戦後統治形態をファシズムにむかって転換していく歴史的序幕となるであろう。

天皇制・天皇制イデオロギーは、このように戦前、戦後を貫いてブルジョアジーの独裁支配を強力に補完しつづけ、危機の時代には侵略反革命戦争への総動員と階級闘争の根絶を目的とするファシズムの支柱としての役割をはたしてきた。天皇制はわが国におけるブルジョア民主主義革命の不徹底さゆえに残存する過去の遺制では断じてなく、ブルジョア独裁といささかも矛盾するものではない。それゆえにこそ、天皇制の打倒は、プロレタリアートの社会主義革命によってこそ可能なのである。

天皇制・天皇制イデオロギーとの闘争の意義

同時に、天皇制の打倒と天皇制イデオロギーの影響をプロレタリア人民のなかから一掃していくたたかいは将来の革命の課題ではなく、今日のプロレタリアートの階級闘争と階級意識を発展させていくために重大な位置をもつことが確認されねばならない。なにゆえ、われわれはいま天皇制・天皇制イデオロギーとのたたかいを問題にするのかが固く意志一致されねばならない。

それは第一に、侵略反革命戦争に労働者人民を排外主義的に組織するための民族排外主義の支柱となりうるのは天皇制イデオロギーのみであること、プロレタリア人民を排外主義と分岐させ全世界の階級闘争にたいする国際主義的連帯へ組織していくためには天皇制・天皇制イデオロギーとの闘争が不可欠だからである。

中国を侵略する日本軍▶

第二次大戦における日帝の敗戦は、戦後革命期におけるプロレタリア革命の勝利にはいたらなかったが、反戦平和に代表される意識を広範に生みだした。侵略反革命戦争の準備を急ぐ日帝にとってこれは弱点であり、戦後反戦平和意識の解体が焦眉の課題となっている。中曽根が「戦前には皇国史観があった。戦争に負けると東京裁判史観が出てきた。しかしあのとき日本には何でも悪いのだという自虐的風潮、戦前の悪いことを書けばそれでいいと考える風潮があった。私は反対だ。勝っても国家、負けても国家である。汚辱を捨てて栄光を求めて進むのが国家であり、国民の姿である」と強調し、国内外の激しい反対をおしきって靖国神社公式参拝を強行したのはこのブルジョアジーのあせりを示している。

侵略反革命戦争に出陣し、国家と民族のために命をかけることが価値あることであり、賞賛されるべきことだとするイデオロギーへ再組織することが必要なのだ。帝国主義が侵略反革命戦争にふみだす時には、自民族を支配家の他民族にたいする優越性を保障し、自民族と国家が他民族を支配することを正当化するイデオロギーが存在してきた。ナチスドイツにとっては、ドイツ民族の血の優越と反ユダヤ主義のイデオロギーであり、米帝にとっては「民主主義の守護者＝世界の憲兵」であった。わが国においては現在にあってもこのような役割りをはたしうるイデオロギーは、天皇制イデオロギーのみである。「万世一系の天皇を元首とする日本民族は世界のどれよりもすぐれた民族であり、他の民族を支配し天皇のもとで共存共栄するのだ」という戦前の「大東亜共栄圏」「八紘一宇」の思想に示された民族排外主義イデオロギーの支柱として、天皇制イデオロギーの強力な浸透がすすめられている。

その第二は、階級闘争を解体し、本質的にはブルジョアジーの利益にすぎない民族的国家的利益のもとに国民を統合していく要となりうるのは、天皇制・天皇制イデオロギーのみであること、プロレタリアートの階級闘争をブルジョア独裁権力とその国家の打倒にまで発展させるためには、天皇制・天皇制イデオロギーとの闘争が不可欠だからである。

侵略反革命戦争に労働者人民を動員するために、ブルジョアジーにとっては、ブルジョアジーの階級的利益を階級間の利害対立をこえた普遍的な民族的利益であると装い、階級対立の非和解性の産物であり資本主義社会にあってはブルジョア階級独裁の道具である国家を、階級間の利害対立をこえた普遍的な民族の利害を代表するものであると装うことがぜひとも必要である。そしてこの民族的国家的利益のもとに階級闘争は従属し鎮静化されるべきものであって、階級闘争を国家とその権力をめぐる闘争にまで断じて発展させてはならないとするプロレタリア階級意識と階級闘争の解体が不可欠である。しかしわが国のブルジョアジーや自民党政府は民族や国家を代表し、そのもとに国民統合をなしうるだけの権威をもちあわせていない。そこにブルジョアジーが国民統合の要として天皇制・天皇制イデオロギーを強力におしだしていかねばならない理由が存在するのである。

その意味では、戦後憲法に規定された「国民統合の象徴としての天皇」という象徴天皇制とそのもとでの天皇の存在自体が、プロレタリア階級闘争と階級意識の発展をおしとどめ解体するイデオロギー攻撃を内包するものであった。なぜなら象徴天皇制の中にはブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立は非和解的なものではなく、天皇に象徴される民族的国家的利益の前では和解可能であり、国民として統合されるものだとするイデオロギーがつらぬかれているからである。「天皇への敬愛と天皇に象徴される民族と国家の前には資本家と労働者もないんだ」――ブルジョアジーはこうして、慎重かつ巧妙にブルジョアジーの独裁支配とその道具としての国家をプロレタリアートの眼前からおおいかくしつづけてきた。象徴天皇制をうけいれるかぎり、プロレタリアートの中に階級対立の非和解性にたいする確固たる確信を育み、階級闘争を国家とその権力をめぐる闘争へ、すなわちブルジョア独裁権力の打倒とプロ独権力の樹立をめぐる闘争にまで発展させていくことは絶対にできないのである。

侵略反革命戦争の準備を急ぐ日帝は、いま従来とはくらべものにならないほど強力な国民統合にふみだしていくことを迫られている。中曽根が「戦後民主主義は物欲主義や無責任

の風潮を生み国家の概念が放棄されてしまった」と嘆き、「新国家主義」なるものをぶちあげたのもブルジョアジーのあせりをこの面において示すものである。ブルジョアジーはいま天皇制・天皇制イデオロギーのもとへの国民統合を思いきって攻勢的に組織しようと決断している。それはイデオロギー攻撃にとどまらない。階級闘争がブルジョア独裁権力とその国家の打倒へと発展していくことにたいして、天皇によって権威づけられた普遍的な民族と国家の利益を脅やかす反民族的反国家的行為として徹底弾圧し、共産主義者やたたかうプロレタリア人民を「非国民」として弾圧していくことがもくろまれているのである。

その時、天皇を非政治的存在として印象づけてきた象徴天皇制は、ブルジョアジーにとって不都合なものになってきた。そこに天皇の元首化を必要とする根拠がある。このかんの天皇元首化攻撃は、ブルジョアジーが実際に政治権力を天皇に渡そうというものではもちろんなく、また戦前の大日本帝国憲法が規定した地位をもう一度天皇に与えようとするものでもない。天皇を国家元首とすることによって、象徴天皇制のもとで後退した天皇の権威を再建し、天皇を正規に民族と国家を代表する政治的存在へと転換させていくことが目的なのである。プロレタリアートの階級闘争と階級意識を発展させていくために、象徴天皇制下の戦後四〇年の間とくらべても、より一層意識的な反天皇闘争が組織されねばならない時代がはじまっているのだ。

その第三は、わが国においてファシズムの支柱となりうるのは天皇制・天皇制イデオロギーしかありえないこと、日帝のファシズム準備とたたかうためには台頭する天皇主義ファシズム運動を粉砕し、天皇制・天皇制イデオロギーとたたかうことが決定的に重要だからである。

典型的には戦前のドイツやイタリアの経験が示すように、帝国主義の危機の時代に没落する小ブルや階級闘争からの脱落分子を中心にして台頭するファシズム運動は、その最初の段階では反共産主義とともに反資本主義すらかかげ、現社会の暴力的変革を唱える右からのエセ革命運動の装いをまとい、行き場のないプロレタリア人民の憤激を吸収することによって成長する。そしてファシズム運動は権力に近づくにつれて革命運動的スローガンを後退させ、ついには侵略反革命戦争への国民総動員と階級闘争の根絶を目的とするブルジョアジーの独裁権力へと転化する。帝国主義の相対的に弱い環であるわが国においてもこのかん帝国主義の危機の深まりの中でファシズム運動が台頭し、ブルジョアジーはファシズム統治形態への転換を準備してきた。

戦前わが国のファシズム運動の支柱となったのは、天皇制・天皇制イデオロギーである。ファシストイデオローグであった北一輝や二・二六事件をひきおこした皇道派将校たちは、米帝など他の列強との関係で危機に陥り、農村の困窮や都市住民の貧困と零落が生まれ、労働者や農民の反抗が激発する根拠は、官僚や資本家が天皇の意志を実現せず、私利私欲を求め腐敗しているからだととらえ、彼らを打倒して天皇親政の国家への改造を夢みた。彼らの「昭和維新」＝ファシストクーデターは失敗したが、かかるファシズム運動の台頭を背景にして、ブルジョアジー自身がファシズム統治形態への転換をおこない、戦争への総動員と階級闘争をあとかたもなくおしつぶすほどの弾圧が天皇制のもとで組織された。

今日台頭する右翼ファシズム運動もまたそのほとんどが、天皇制・天皇制イデオロギーを中心とする国家改造をかかげている。それは決して偶然ではない。天皇制・天皇制イデオロギーがあたかも階級間の利害と歴史をこえて、民族的国家的利益を代表するかのように存在しており、またかつて神格化され、いまなお浸透している天皇の権威は、階級闘争の根絶にいたるまでの大弾圧を「天皇のためなら何をしても許される」と正当化する強力な武器となるからである。現在の段階でもブルジョアジーは、天皇の行く先々で地域的な戒厳体制をしきつめ、精神障害者を差別的に予防拘束し、たたかうプロレタリアート・共産主義者を厳重な監視下におくなど、まさに天皇のためならどのような大弾圧も超法規的措置も許されるとする現実が横行している。

ブルジョアジーが天皇制・天皇制イデオロギーを強化するのは今日の必要のみならず、将来、帝国主義の危機が煮つまる階級的激動期に、天皇制を支柱としたファシズム統治形態への一挙的転換をなしうる準備としてあるのである。

天皇制の打倒はプロレタリア社会主義革命によってのみ可能である。そしてこの革命の主体であるプロレタリアートを国際主義で武装し、階級意識を成長させ、プロレタリアートの階級闘争をブルジョア独裁権力とその国家の打倒、プロレタリア独裁権力の樹立という国家と権力をめぐるたたかいにまで発展させていくためには、天皇制・天皇制イデオロギーとのたたかいが不可欠であることを再確認しなければならない。そうしなければ逆に天皇制・天皇制イデオロギーを支柱とした侵略反革命戦争とファシズムの準備の前に、とり返しのつかない敗北を強制されるであろう。

だからこそわれわれは、戦後史を画する天皇攻撃の強化を前にして、プロレタリア階級をその深部から天皇制打倒のたたかいへと組織し、天皇制イデオロギーの影響を一掃していくためのたたかいに起ちあがる決意である。それは決してたやすいことではない。天皇・皇族の権威とこれへの「敬愛」あるいは「親愛」の感情は、ブルジョアジーの手によって広範に浸透させられている。経済闘争では戦闘的にたたかい、資本家は敵だと考える労働者であっても、天皇は資本家と労働者の対立をこえた存在であると考え、天皇制を支持する部分は多い。われわれはプロレタリアートのただ中で、天皇制・天皇制イデオロギーを強化しようとするブルジョアジーのねらいを暴露し、天皇制・天皇制イデオロギーがプロレタリアートの階級闘争の発展に敵対するものであることを暴露し、階級闘争の発展のためにはこれとたたかわねばならないという確信を生みだしていかねばならない。

プロレタリア政治闘争との結合が飛躍のカギ

プロレタリア人民を反天皇制闘争へと広範にたたきあがらせ、天皇制イデオロギーの影響を一掃していくことは、天皇制・天皇制イデオロギーの批判的暴露とそれにもとづくたたかいへの呼びかけのみによっては決して勝利しえないものである。反天皇闘争を広範に組織するうえでの困難は、歴史的背景をもって天皇制・天皇制イデオロギーが浸透させられていることだけではなく、わが国におけるプロレタリア階級闘争と階級意識の未発展な現状が、天皇制・天皇制イデオロギーを敵ととらえ、階級闘争の勝利のためにはこれと断固としてたたかわねばならないという確信を生みだしていくことを困難にしているからである。

天皇制・天皇制イデオロギーともっとも根本的に対立するものは、プロレタリアートの政治要求でありプロレタリア前衛党の革命的実践にある。

天皇制・天皇制イデオロギーにつらぬかれる民族排外主義と根本的に対立するのは、全世界のプロレタリアートの連帯と解放を要求するプロレタリア国際主義である。天皇を前面におしだしたブルジョア独裁国家への国民統合と根本的に対立するものは、現在の国家をブルジョア独裁支配の道具ととらえ、その打倒とプロレタリア独裁権力の樹立を求めるプロレタリアートの政治要求である。天皇制・天皇制イデオロギーを支柱としたファシズムの準備と根本的に対立するものは、プロレタリア前衛党の革命的実践である。あらゆる資本主義の改良、あらゆる改良政府に絶望したプロレタリア人民の行き場のない憤激をファシズムの側においやるのではなく、プロレタリア社会主義革命の側に獲得するためには、資本主義・帝国主義への批判と共産主義への希望がプロレタリア人民の中に広くうちこまれ、ファシズム運動を圧倒するプロレタリア前衛党の権威と革命性・前衛性が発揮されなければならないのである。

しかしわが国のプロレタリアートは、このようなプロレタリア政治要求からいまだ遠く

へだてられており、プロレタリア前衛党の建設は階級闘争の要請にくらべて大きく立ち遅れている。だから問題はこうなのだ。天皇制・天皇制イデオロギーにたいして広範なプロレタリア人民を立ちあがらせ、これと最後までたたかう能力を形成していくためには、プロレタリア人民をプロレタリア政治要求に結集させていくためのプロレタリア政治闘争が圧倒的に組織されねばならない。われわれは当面、ニカラグア、フィリピンなど全世界の反帝民族解放―共産主義革命との連帯、自国帝国主義の侵略反革命との闘争を主課題として、国際主義で武装した壮大なプロレタリア政治闘争の組織化に着手する。これをとうして資本主義への断固とした批判、帝国主義の世界支配との闘争の必要性、共産主義社会建設の希望、ブルジョア国家打倒の必要性と武装闘争の不可避性、そして党の必要とスターリン主義批判が、たとえどんなに素朴でありも、第一歩的ではあっても、プロレタリア人民の中にうちこまれ前進させつづけられねばならない。そうすることによってのみ、プロレタリア人民を天皇制・天皇制イデオロギーとの闘争に最後まで組織することができるのだ。

反天皇闘争をプロレタリア政治闘争と結合させること、反天皇闘争を国際主義に武装され、武装蜂起―プロ独へとプロレタリア人民を結集させつづけるプロレタリア政治闘争に解放されたたたかいへと発展させることが決定的に重要なのである。

第三章―反天皇制闘争を階級的に領導せよ

われわれの反天皇闘争にたいする立場は、以上のべてきたように次のものである。①天皇制の打倒は、プロレタリア社会主義革命によってのみ可能である。②プロレタリアートの階級意識を発展させつづけ、階級闘争を国家と権力をめぐる闘争にまで発展させるために、日帝の戦争とファシズム準備の支柱である天皇制・天皇制イデオロギーとのたたかいにプロレタリア階級を根底からたちあがらせねばならない。③反天皇闘争とプロレタリア政治闘争を結合させ、反天皇闘争を国際主義に武装されたプロレタリア政治闘争に解放されたたたかいへと発展させること、これである。

だからこそ反天皇制闘争は、プロレタリア社会主義革命とそれにむけた階級闘争に首尾一貫した責任をおうプロレタリア前衛党の領導と指導性のもとでこそ真に発展させることができるのである。すべてのたたかう労働者・学生が共産同（全国委）と全国労政に結集し、反天皇闘争の前進のために全力でたたかわれんことを訴える。

そのために最後に、社共、右翼日和見主義、急進民主主義への批判と今春季の実践的任務を提起する。

社会党はもはや完全に反天皇制闘争を放棄したばかりか、昨秋の日の丸・君が代の強制に対して「日の丸が国の標識として用いられてきた経過は否定できない」と表明したように天皇攻撃を積極的に容認するにいたっている。総評指導部はさらにすすんで、総評議長黒川の天皇主催園遊会への出席や、昨年の「建国記念日」奉祝式典で「天皇陛下万歳」の音頭をとった宇佐見を会長とする同盟との労戦統一を進めるなど天皇主義労働運動にまで転落しようとしている。

日共もまた反天皇制闘争を実際上放棄している。戦前から戦後五〇年代まで日本共産主義運動の唯一の党であった日共は、戦前においてはコミンテルン三二テーゼにもとづいて天皇制を実質上絶対主義と規定し、日本革命の戦略を「絶対主義的支配」を打倒するブルジョア民主主義革命であるとした。そうすることによって三二テーゼが当面の革命の主任務として筆頭にあげた「天皇制の転覆」を、ブルジョアジーの打倒、ファシズムの打倒と完全に切りはなすという誤りをおかした。この三二テーゼの立場は戦後にもひきつがれ、米帝占領軍による民主化政策の一環であった象徴天皇制の登場のなかで、天皇制＝絶対主義とした日共には本質的にはもはやたたかうべき天皇制は存在しなくなったのである。

急進民主主義、右翼日和見主義は、天皇制の打倒を日帝の打倒と結びつけて主張する点では社共とはまったく異なってはいる。しかし、プロレタリア階級闘争の発展にとって天皇制とのたたかいがどのような位置をもつのか明らかにできず、反天皇闘争をプロレタリア政治闘争と結合させることができないがゆえに反天皇闘争を領導しえぬ小ブル的誤りにおちいっている。

急進民主主義派は、天皇制ボナパルティズムへの転換とたたかい、四、五月蜂起戦にたたと主張する。しかし封建領主階級が完全に消滅したこの高度に発展した資本主義国で、初期ブルジョア国家にあらわれるブルジョアジーと封建領主階級の連合独裁であるボナパルティズムへの転換を想定することはそもそも誤りであり、ブルジョア独裁権力の打倒とプロレタリア独裁権力の樹立にむかうべきプロレタリアートに敵の姿を見えにくくするものである。さらに彼らは、天皇制・天皇制イデオロギーの強化を反動攻勢のなかに解消し、天皇攻撃がもたらす民主主義の破壊にたいする人民の憤激に直接依拠し、その急進化を願望することによって反天皇闘争をプロレタリア政治闘争と結合させることを否定してしまっているのである。

他方、右翼日和見主義の多くは、天皇攻撃との闘争を、天皇制に屈服する内なる思想的根拠の解体などを主張し、天皇攻撃との闘争をプロレタリア政治闘争への組織化を通した階級形成とは切断された思想問題に歪曲している。

社共の屈服と右翼日和見主義、急進民主主義の誤りとたたかい、今春の反天皇闘争の発展を全力できりひらかなければならない。

それは第一に、二・一一「建国記念日」奉祝式典と中曽根のこれへの出席、小・中・高校の卒業式における日の丸・君が代の強制、四・二九天皇在位六〇年式典、五・一一大阪植樹祭への天皇の出席、八・一五中曽根の再度の靖国公式参拝、一〇月皇太子訪韓、八七年九月天皇訪沖、Xデーとなだれをうってうちつづく天皇攻撃の強化と断固としてたたかい、とりわけ四・二九闘争への総決起を実現しなければならない。

第二には、天皇制・天皇制イデオロギーとの闘争にプロレタリア人民を根底から組織するたたかいに本格的にとりかからねばならない。そのために、天皇制・天皇制イデオロギーが日帝の戦争とファシズム準備の支柱としてあることを徹底して暴露しなければならない。そして天皇と天皇制は、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立をこえる存在ではなくブルジョアジーの階級的利益を擁護するブルジョア階級支配の道具であること、プロレタリアートは自己の解放のために天皇制・天皇制イデオロギーとたたかわねばならないという階級的確信を広範につくりだしていかねばならない。

第三には、抬頭する天皇主義ファシズム運動を粉砕しなければならない。天皇制ファシズム運動は、右からのエセ大衆運動を組織し影響力を拡大してきたばかりか、山谷争議団山岡氏の虐殺、日大における銀ヘルへのテロルと文理学部武装制圧策動など戦闘的労働運動、学生運動にたいする暴力的破壊活動を頻発させてきた。これら天皇主義ファシズム運動を実力で打倒するたたかいは一層重大な課題となっている。

第四には、四・二九を前にして活性化する反天皇闘争を、全世界の反帝民族解放―共産主義革命と連帯し、日帝の戦争とファシズム準備とたたかい、武装蜂起とプロレタリア独裁へとプロレタリア人民を階級形成しつづけるプロレタリア政治闘争と結合させることであり、かかるプロレタリア政治闘争に開かれたものへと反天皇闘争を発展させていくことである。

以上の任務をしっかりと確認し、今春季、反天皇制闘争を突破口に、五月東京サミット粉砕闘争にわれわれとともに全力で決起し、プロレタリア政治闘争の爆発をかちとれ！

寄稿▼

今回、天皇制や日韓問題で活発な活動をおこなっておられる桑原重夫氏と、「日の丸・君が代」強要攻撃をはねかえさんと沖縄の地で労働運動の分野でたたかっておられる中部地区労の平良真知氏より天皇制問題について寄稿していただいたので、掲載いたします。

いま、天皇制とどう戦うか

桑原　重夫
（日本キリスト教団摂津富田教会牧師）

もう、十年近くも前のことになる。たとえばこの「烽火」を読んでいる層の人たちと、盛んな天皇制論議をやったことがある。マルクス主義者といわれる人が「権力論」を中心にした政治制度の面から天皇制をとらえようとするのに対して、もっと、それを要求して支えてきた「下から」の民衆意識の問題を等閑にするならば、このねばっこい天皇制の前で、戦前と同じ敗北を喫することにもなりかねないといい続けて来たのである。

別に、根本的な主張点が違ったわけではない。けれども認識や評論の対象としてでなく、「打倒」という戦いの課題の中で天皇制をとらえる時、大衆の意識や幻想とからみ合って歴史の中で織りなされていくダイナミックな動きの性格をとらえそこなうならば、同じ運動である筈の反天皇制の戦いが、案外、方向のちがったものにもなりかねないのである。

天皇制再登場の根拠にメスを

いまの中曽根政権の天皇制かつぎ出しの意図に関しては、いまさらここでいうまでもないであろう。いま、権力側が精力的におし進めようとしている攻撃に、この四月二十九日に予定されている「天皇在位六十年式典」がある。そして大阪では、それと関連しての堺市・大仙公園での植樹祭が五月に行われ、その時に、盛大な御堂筋パレードを行って、あらためて「天皇の御代」を大阪の住民にも印象づけようとしている。それに対して、反天皇制運動の側の戦いの目標も、当然こうした動きに向けられることになるだろう。そして、それに「天皇Xデー」の取り組みが続くことになる。ことしの年頭の「烽火」で報告されていた「反天皇制のうねりを！関西連帯会議」の当面の闘争課題も、そこにしぼられようとしている。

それはそれで当然のことである。現在の資本主義体制の危機の中で、アジア・太平洋地域では「日韓米新時代」という構造をつくって体制の維持延命を図り、それを恰も民衆の願いであるかの如く思わしめるため、ナショナリズムを喚起してそこに大衆を取り込み、ブルジョア階級の政治委員会にすぎない「国家」に対する民衆の幻想をかきたてて侵略と戦争を進めようとするのが、こうした天皇制の動きであるとするなら、政治的行動としてそれに反撃していくことが、今日「反天皇制」を口にする者の当然の課題である。

そのことを充分にわきまえた上で、しかし私は一つのことを主張し続けてきた。その思いは、いまも以前と少しも変っていない。それは、単に政治的現象に対する政治スケジュール的闘争だけではなく、いま天皇制が登場してくる、その根源的な理由に迫らなければならないということである。この超近代的で高度に合理主義の時代に、一見時代遅れと思える天皇制が登場して一定の政治的役割を果たすのは何故かという思いが私たちの間にあるが、その「何故」に徹底的にメスを入れることが、こと天皇制に関する限り不可欠である。

国家の結集軸としての天皇制

私は、共同体を志向して、それと同じ大きさまで自己を肥大化させて充足感を持つ民衆の心情が、「国家」への幻想にすりかえられて取りこまれ、「国家」に帰属することによって生甲斐と充足感を持ってしまう、その精神構造と深く関わりがあると思う。「国家」が民衆の共同体志向を吸収するためには、壮大な儀式や祭典を演出しなければならないのである。そのような共同体としての「国家」の結集の軸としての天皇制の役割を、どのように分析し、どのように撃つかということが問題である。

歴代の首相の中で最も天皇主義者である中曽根が、登場以来「民族共同体」と叫んでいることもこれと関連して考えられなければならないし、その中曽根の昨年八月十五日の「靖国神社公式参拝」も、違憲論や軍国主義復活論などではなく、この視点からとらえなければならないのだ。そこで造られる幻想としての充足感が、あらゆる現実問題を全くの仮象と思わしめる程の効力を発揮して、新国家主義を「下から」強固に支える力になる。そこに、天皇制の強さがあることを知らなければならない。

たとえば、神道青年全国協議会では、天皇在位六十年奉祝行事として、固苦しい政治論議はやらず、「日本の祭」というテーマで全国的な催しを行い、宇崎竜童などを起用して入場無料の「和太鼓とロック」のコンサートを行い、若者を陶酔させる計画が確定している。かつて、ヒトラーのナチスも、日本の天皇制に範をとってこの種の演出を行い、民衆を「国家」に動員して侵略に躍り出た。

この動向に対応できる問題意識を、反天皇制の側は、どれほど持ち合わせているのだろうか。

（小見出しは編集局の責任でつけました）

「反天皇国体」のたたかい

平良　真知
（沖縄・中部地区労）

八七年沖縄国体において支配者側は、「戦後政治の総決算」の完成を目論んでいる。それは沖縄内部の保守反動潮流の中からは、西銘知事に代表されるように、「国体に天皇陛下をお迎えし、沖縄の戦後を終らせたい」という動きと軌を一にし、まさにいま沖縄人民への思想攻撃に全面的に乗り出してきている。

○中部地区労のたたかい―

八五年九月五日文部省通達は、全国の各学校行事に「日の丸」を掲げ「国歌」を斉唱するようにとの強制をなし、それを受け沖縄県議会、那覇市議会、具志川市議会などの地方議会でも「日の丸」掲揚の促進決議を強行してきている。

またそれに先だつ六月、七月に行なわれた沖縄国体のリハーサル国体においては、体協や国体事務局の主催者側は「日の丸」掲揚とテープによる「君が代」演奏を強行している。中部地区労管内でも七月二一日、具志川市営体育館において九州高体連バレーボール大会がリハーサル国体を兼ねて行なわれた。「日の丸」掲揚と「君が代」のテープ演奏を主張する主催者側に、具志川市内の自治労、教組、高教組、全駐労を中心とする市労協が反対要請行動を展開。しかし、その要請を主催者側は拒否。そのため中部地区労、県労協、沖教組、高教組、市労協の五者は、当日会場前での抗議集会の後、全員が体育館内に陣取り、「日の丸」の事前掲揚と、「君が代」のテープ演奏に強烈な抗議のシュプレヒコールとヤジを展開。そのため「君が代」のテープ演奏は一切聞こえないほど体育館内は抗議のヤジで充満し、完全に制圧。そのことにより主催者側のメンツは丸つぶれ。このため二日後に行なわれた閉会式では、主催者自ら「もう

『君が代』のテープ演奏は取り止める」との成果を克ち取った。

この「日の丸」「君が代」問題は現在沖縄県内でホットな論争が展開され、県内二紙の投書欄を連日のように賑わせている。

そしてこれから小・中・高校での卒・入学式における「日の丸」「君が代」問題が最大の争点になる。さらにその直後から全市町村におけるリハーサル国体も予定されており、今年はまさにこの問題の決戦の年となる。これら集中豪雨的ともいえる「日の丸」「君が代」の思想攻撃に対して、中部地区労は、全力を挙げた取り組みを展開してきている。

中部地区労管内の小・中・高校は合計で一一五枚。これらの現場においてほぼ同時に卒・入学式が行なわれる。そのため地区労が直接対応することは不可能になる。そこで、各市町村ごとに闘う体制をつくるため、各市町村に「住民会議」を一月いっぱいに結成することになっている。それに向け、八五年一二月一四日と一五日の両日、各市町村から活動家を結集させ、宿泊研修会を持ち、同時にその場において、各市町村ごとの「住民会議」結成準備会をスタートさせた。

そして二月五日には、これら「住民会議」結成の打ち上げと、三月以降の大闘争を打ち抜いていく決起の場とするため「平和を考える大講演会」を地区労十割の根こそぎ動員で克ち取っていく準備を進めている。

二・五をバネに反「日の丸」「君が代」の大攻勢に転ずる決意だ。

○若者をどう組織するか―

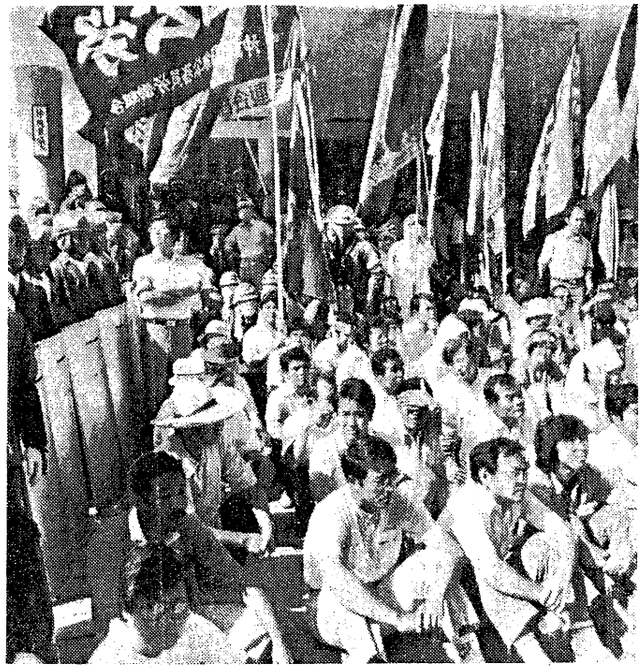
ところで天皇問題は七五年海洋博の際の皇太子来沖問題、八四年日赤全国大会へのやはり皇太子来沖問題が、戦後の中では起きている。それまでは天皇について、沖縄では話題にも登場して来ていない。皇民化教育を受けた世代もすでに五〇才以上の人達になってしまい、それ以降の人達、特に若い世代にとって天皇問題というのは関心の外である。従って天皇についての感想なり、イメージなりは「うさん臭いジジイ」「週刊紙のお馴じみさん」程度でしかない。さらに「天皇なんて関係ない」という調子で無関心層が実に多い。

この状態は一見、天皇無関心層が増えているから、天皇の神通力は弱まった、と見えるが、しかしこのことは歓迎されるべきものではない。

天皇（制）問題への無関心は、政治への無関心と大体においてオーバーラップする。

私達闘う者にとって最大にやっかいなことは、面前に出てくる機動隊や保守反動の自民党より、これら全てに無関心で日々を過ごす大衆の存在である。この日常の無関心こそが保守反動勢力の基盤であり、天皇（制）を頂点とする日本支配機構を支え黙認する存在だからである。この圧倒的無関心層が強固に存在する限り、天皇（制）を頂点とする支配機構も存在する。いかにこの政治的無関心層の感性を衝いて、反天皇（制）、反自民、反核などの闘いを進めるか、このことを絶えず中部地区労は意識しながら日常の闘いを構築している。

八七年沖縄「天皇」国体に照準を合わせ、組織の全力を挙げて闘い抜く決意である。



「日の丸・君が代」促進決議に反対してすわりこむ沖縄の労働者
（85年10月16日沖縄県議会前）

許すな軍用地強奪

沖縄　公開審理がスタート

現在、沖縄では一九七九名が「自分の土地は一坪たりとも戦争のためには使わせない」と基地への土地提供契約を拒否している。この未契約地主＝反戦地主の存在は、沖縄を侵略反革命の前線基地として永久に固定化しようとする日帝の前に大きく立ちはだかるものとしてある。そうであるがゆえに日帝は、反戦地主の壊滅のためにあらゆる手段を駆使した切り崩し攻撃をかけてきている。

◎土地強奪狙う防衛施設局

反戦地主の土地は、米軍によって「銃剣とブルトーザー」で強奪されたものであり、そして七二年「復帰」以降は、引きつづき日帝によって奪われつづけているのである。すなわち日帝は土地提供契約の拒否にたいして、七二年には五年間の時限立法である公用地法の制定をもって、七七年には地籍明確化法の制定にともなう公用地法の五年間延長をもって、そして八二年には米軍用地特措法の発動によって、土地を強奪しつづけてきた。

現在日帝は、米軍用地特措法による強制使用の期限切れとなる八七年五月十四日以降も、その先さらに二〇年間も強制使用するべく米軍用地特措法の再発動をもくろんでいる。

八四年十一月の那覇防衛施設局による意見照会文書の発送をもって開始されたこの強制使用の手続きの概要は以下のようなものである。①防衛施設局は地主に意見照会をする②防衛施設局はこの意見書に図面などを添えて総理大臣に強制使用認定を申請する③総理大臣は当該土地の収用・使用が適正かつ合理的と認める場合それを認定する④防衛施設局は土地・物件調書を作製し県収用委員会に強制使用裁決を申請する⑤県収用委員会は公開審理を開催し使用・明け渡し裁決をする。

昨八五年三月、中曽根は強制使用を認定し、八月には県収用委に裁決申請が提出された。そして本年二月二六日には第一回目の公開審理が開催されようとしているのである。

◎公開審理闘争に勝利せよ

この公開審理は、反戦地主が直接日帝・防衛施設局と対峙する重要な攻防戦としてある。「本件申請土地は、わが国の安全に寄与し、並びに極東における国際平和及び安全の維持に寄与するために不可欠な米軍に提供されており」強制使用は当然とする日帝・防衛施設局の反人民的主張を許してはならない。公開審理闘争は防衛施設局との闘争であると同時に、本来裁判官にあたるものとされる収用委とのたたかいにもならざるをえない。なぜなら収用委は日帝の手先、県知事西銘が指名するもので構成されており、いささかの中立・公正も期待しえないからであり、収用委の反動性は八二年の米軍用地特措法発動時に実証されているからである。

反戦地主とともに公開審理闘争に決起し沖縄基地強化粉砕しよう。